

愛 蘭 一 瞥

小 牧 實 繁

一九二八年八月七日、火曜日、雨。午前十時船は蘇格蘭アルドロッサン (Ardrossan) の港を

出る。低氣壓の關係で内海ながら波高く横揺れ縦揺れ交々來り、そうでなくとも船に弱く瀬戸内などでも降參することのなきにしもあらぬ自分には此の上ない苦しみである。愛蘭が見度ければこそ辛抱も出來ると言ふもの。そして到々最後迄頑張つた。身體中の臟物凡てを吐き出しはしまいかと思ふこと前後約五時間、右舷に見た島のスケッチを唯一つの收穫として三時半漸くベルファスト (Belfast) に着いた時は唯々難有いと思つた。そして此の陸棲動物は足一度港の棧橋を踏むともうけろりとしてゐたのである。私は矢張陸上を歩く様に出來てゐるのだから。

う。その癖波の上を渡ることも好きなのであるが。

直ちにタクシーを雇つて大北鐵道車站 (Great Northern Railway Station) に行き、構内のリフレッシュメント・ルームで食事を攝つたが流石に何も喉を通らない。矢張り揺られ通して疲れたと見える。繪端書など買ふ。

工科大学 (College of Technology)、ベルファスト主教會 (Principal Church)、市役所等を見、この美しい役所の傍の某書肆で「北愛蘭報告書」 (Reports of Northern Ireland) などもの水利耕地整理などに關したものの若干を購ふ。町の多くの婦人が黒い毛絲のショールを頭から肩へ掛けてゐる風俗を珍らしいと思つた。

五時十五分驛に歸り、五時半ベルファスト發
南西に向ふ。牧場が多く數多の牛が飼はれ耕地
には馬鈴薯、燕青などが栽培せられ、耕地と牧
場との境などには柳と榆が茂り、又養雞の行は
れてゐる所が多い。地形は車窓から見た丈けで
は英蘭、蘇格蘭の車窓から見たそれと大して異
る様にも思へない。

家屋は美しく白壁で塗られて居りウェールス
のそれと何等かの關係があるのでないかを思は
しめ、藁葺のものが多くが新式の家は赤色の煉
瓦造りである。牧場には垣があるがそれは石垣
ではなし。

汽車は湖水 (Lough Neagh) の南の方を通
るのだが車窓からは見えぬ。六時ポルタダウン
(Portadown) 着。

ポルタダウンから南する鐵道線路は運河と併
行してゐる。そして山地に接近すると牧場には
石垣が繞らされてゐるのに氣付く。山地に近く
石が豊富であるからだと言へば一應説明は着

く。

更に南すると次第に山が高く山に近く民家は
分散して散村を形成し家々は白く塗られ石垣で
圍まれてゐる。此の家々が白く塗られてゐる所
は大いにウェールスのそれに似て居て兩者の間
に何等かの文化的關係があり相に思はれて仕方
がない。併し家屋は概して非常に小さい。全體
として土地も人も貧しいのであらう。

やがて左窓に海を見ると六時五十分ダンダ
ルク (Dundalk) に着く税關の調べがある。何かと
思つたら南北兩愛蘭の境界驛なんだ。

再び走り出した汽車は羊や馬やの飼はれた牧
場、小麥、燕青などの栽培せられた耕地の間を
縫つて南に走る。民家は藁葺で此所では集村を
形成してゐる。

非常に平坦な曠野を走り、愛蘭にもこんな廣
々とした平原があるのかと感心してゐると河を
渡り右窓に都會が現はれる。ドロゲダ (Drogh-
da) である。

それからは汽車は海岸を走り、海端の小寒村の民家の石造で白く塗られたのが目に着く。勾玉の端の様に曲つた砂嘴(terminal spit)が現はれるかと思ふと今度は殆んど垂直な海蝕崖と水平な隆起海岸が認められる。

ダブリンに近づくと海は殊に美しく夏場所になつてゐる。洪積層と思はれる砂礫層の断面の認められるものがあり、砂丘が沼澤地(salt marsh)を擁して居る所がある。

八時汽車は今日の目的地ダブリン(Dublin)に着。北辰館(North Star Hotel)と云ふのに入

る。夕食後九時半から市内を散歩する。ネルソン記念柱(Nelson Pillar)や橋などを美しいと思ふ。一體ダブリンの気分は決して倫敦のそれではなく寧ろ巴里のそれに近い。町の舗装からしてが何だか巴里を思はせる所がある。人氣も至つてよく外國人の我々にも一般に親切の様である。

十一時ホテルに歸り、日記を誌して十二時就寝。

八月八日、水曜日、晴。八時起床、十時出發、クックの半日巡り(Half-day tour)で先づトリニティ・カレッジ(Trinity College)を見る。ゴールドスミス(Goldsmith)の像が目に着く。圖書館を見る。多くの古書籍があり特に装幀の標本が興味を引く。またブライアン(Brian)の豎琴とか、一五四四年ゼノアのアグネシ(Baptist Agnesi of Genoa)の作つた地圖帳とか八世紀の古書(Book of Kells)とか七世紀のラテン語の福音書(Book of Durrow)とかデリーリー(Delhi)の攻略に分捕られたコーランとかミルトンやミル(Milton, Mills)の自筆書簡とか言ふものが注意を引いた。此の圖書館は非常に静かな氣持のよい圖書館である。殊にそのガレリーの欄干の木細工がしつとりと落着いた感じを與へてゐる。

再びシャラヴァンの人となり銀行街を行く。兵

隊が奇妙な音楽を先頭に進んで行く。ダブリン城を訪れる。緑白赤の三色旗が立つてゐる。愛蘭の國旗である。望塔は獄舎として使はれたものと云ふ。

市役所を見る。此の邊にも黒の毛絲の肩掛の女が數多く見受けられる。愛蘭の流行は大分歐羅巴文化の中央よりは遅れてゐる様に思はれる。

十三世紀の御寺 (St. Patrick Church) を訪れる。建築はゴシック風で、十四世紀の愛蘭櫛 (Irish oak) の細工が残つてゐる。

クライスト・チャーチの伽藍を見て裁判所の方へ行く。一九二二年の新建築である。

リッフィー河 (Liffey) に出る。勿論潮が入り干満の差は三米に達すると言はれる。輕快な愛蘭特有の二輪馬車 (jaunting car) の行交ふ可なりの河港である。

公園 (Park Phoenix) に行く。ウェリントン (Duke of Wellington) の記念像がある。動物園

に行く。カソリックの黒衣を被た婦人を見受ける。倫敦などでは餘り見なかつた風景である。

柵を設けた家畜市場を見、セント・ピータース寺 (St. Peter's Catholic Church) を經て墓地に出る。廣々とした墓地である。愛蘭自由國の初代大統領グリフィス (Arthur Griffith) の墓、オコンネル (O'Connell) の塔、その棺、グレー (Sir John Gray) やバンナット (Michael Barrett) の墓などがある。丁度御葬式がある。シルク・ハットを被た御者の附いた馬車が待つてゐる。

植物園がある。黄白赤などの花を着けた秋海棠 (Begonia) が美しい。

オコンネル橋から税關を遠望し、美術館 (National Gallery of Ireland) 博物館を素通りして一時喫茶店で中食。クックの車にさよならし、御上りさんらしい見物を終る。

中食後、少しく自分で歩いて見ることにする。再びツリニティ・コレッジを訪れその博物館を見る。地質學及び工學の陳列室があるんだが貧弱

である標本の數も少い。有名なジョリー (Joly) 教授の室も見つかつたが専門は大分違ふので訪問は遠慮する。地理學教室の設けはない。コレッジの配置や氣はひ等は劍橋のそれと大して異なる所はない。一七七〇年創立の史學協會 (Historical Society) と言ふのがある。圖書館で繪端書を得て國立博物館 (National Museum) を指す。

先づ出版物を購ひ陳列品を見にかかると。一九二七年英國考古學院 (British School of Archaeology) 寄贈のバレスチナ發掘品がありその中にフリントの鎌や石製のランプのあるのを珍らしいと思ふ。併し何と言つても最も觀者の興味を引着けるものは愛蘭國內からの發見品、殊にその石器時代遺物である。實際色々ものが殆んど無數に蒐集せられてゐる。そしてその蒐集の基調をなすものは實に湖上住居の遺物である。七時迄かかつた自分は唯夢中で見入つたのである。纏まつた蒐集としてはクノウル (Knowles)

の蒐集、愛蘭考古學會 (Royal Society of Antiquaries of Ireland) の蒐集、ペトリ (Petrie) バッターソン (Patterson)、オールダム (Prof Oldham)、ミリガン (Miligan)、ペリー (Perry) の蒐集等が主要なもので、珍らしいと思つたものには或る泥炭地から發見せられた箭の一部と鎌を緊つた紋、石製弓籠手、バン河 (Bann) の流域から發見せられた、はんだいきり (moss) の柄の着いた儘のフリントのナイフ、ドネガル (Donegal) 地方ダングロ (Dungloe) 砂丘中の貝塚から發見せられた剝片、石仁、槌石類、その他ドネガル地方バンベグ (Bunbeg) 砂丘中の貝塚同バンドラン (Bandoran) 砂丘中の遺蹟、同ナラン (Narran) 砂丘中の遺蹟發見の石器時代遺物、ダウン (Down) 地方ダンドラム灣 (Dundrum Bay) 沿岸砂丘遺蹟發見の遺物 (一九二二年 Ward 氏の蒐集でその中には青銅のピン等がある) などがある。尙考古學的には大したものではないが地理學的に大いに興味を喚起

するものにはアントリム (Antrim) 地方ラレン (Larne) の海岸で發見せられたフリントの剝片及び石仁がある。之れはラレンの隆起海岸に發見せられるもので恐らく之れが愛蘭に居住した人間最古の遺物である、即ち此等遺物は海岸に礫が堆積せられその海濱が形成せられつゝあつた時代に人間の居住したことを示すもので、その後此の海岸は地盤の變動によつて海面上二〇呎の高さ迄隆起したものであると考へられてゐる。考古學的に面白いものにはクノウルの蒐集中に、六個の小磨製石斧が之れの磨かれた石の上に並置せられたものがある。又たフェルマナ (Fernagh) 地方マジニューレス・ブリッジ (Majures Bridge) 發見の木製柄の附着した石鑿などがある。人骨では White Park Bay 東端發見の頭形指數七六・八と言ふ長頭々蓋一個がある。一生懸命に見て居る所へ一人の紳士が近寄つて來て話される段々話す中にそれが此の博物館の館長マール博士 (Dr. Mahr) であることが

解る。自分は大體人を訪問することが嫌ひで今日も勝手に陳列品を見ることにしてゐたのであるが、先方から話しかけに來られては誠に失禮をしたなどといふ念が湧き、その親切に與へられる指示が尙更難有く思はれた。そして閉館時刻を多少経過してもまあ何とかなるだらうと思ふと嬉しかつた。實際到底も豊富な蒐集なんだから一二時間では一瞥だも出來ないのである。深く氏の厚意を謝し、續けて蒐集品を見る。

主として湖上住居の遺物に力を注ぐ。ダブリンの西北ミース (Meath) 地方ダンシャウリン (Dunshaughlin) 附近ラケール (Lagore) の湖上住居遺物—これは元來ペトリ博士 (Dr. G. Petrie) の蒐集にかかるといふ多數の同種遺物が陳列せられてゐる。アントリム (Antrim) 地方モイラルグ湖上住居 (Moylurg crannog) ノマナク地方バリードゥラッグ (Ballydoolagh) 湖上住居、アントリム地方クレイギイワッレン (Craigwarren) 湖上住居 (一九〇一年、クノ

ウルス等の發掘する所)、ロスコモン地方(Roscommon)ストロークスタウン(Strokestown)の湖上住居、地方不明アイルス湖(Lough Eys)の湖上住居、地方不明ドラムゲイ(Drumgay)の湖上住居、ミース地方モイナグ(Moynagh)の湖上住居遺物、一九一三年ガルウェー地方(Galway) ツアム(Tuam)附近に發掘せられたロクペイル(Lochpaire)の湖上住居遺物カヴァン(Cavan)附近カル・ナ・ガ
ル(Carna-Gall)の湖上住居より發掘せられた丸木舟の底部に發見せられた鐵器、有釉彩色土器、破片(四個)、西ミース地方バリンデリー(Ballinderry)の湖上住居、カヴァン地方トニーモ
ーア(Tonymore)の湖上住居、地方不明アヴィラ(Avilla)の湖上住居、アントリム地方レヴェル(Revel)の湖上住居、リメリック地方(Limerick)グル
(Gur)湖の湖上住居遺物等がその主なるものである。

其の外鐵器時代前期(La Tène)の遺物その他種々の蒐集があるが、一々は煩はしいから記さ

ぬ。

七時前漸く見終り、館員殆んど退出の後獨り私の陳列品を見終るのを待つて居て下さつたマール先生の室を訪れ暫く對談した後厚く其の芳情を謝し共に館外に出、別れの辭を告げるが先生中々聽かれぬ。是非自分がタクシーを呼んでやると言はれる。非常に親切な人だと思つた。

氏は以前壞太利國維納の自然史博物館に居たマール(Dr. Adolf Mahr)その人で其處の館長バ
イエル氏(Joseph Bayer)と合はず終に逐ひ出されたか飛び出したかして此の地に渡りその國立考古博物館キグとなつた人で、切りに東洋考古學者との交歡を主張し京都の濱田博士のことなどを度々口にして居られた。やがてタクシーを呼止め私を乗せて行先を告げた後獨りで歸つて行かれた。深く別離の悲哀を感じざるを得なかつた。

七時北辰館に歸り、直ちに夕食、宿料を支拂ひタクシーを雇つて急ぎ港に向ふ。船中に落着

き日記を誌す中に入時十五分となり船は靜かに
纜を解いてリヴァプールに向ふ。平安な航海で

ある。(昭和七年七月十二日稿)

伊太利ところぐ (三四)

瀧川規一

〔メヂチ家に對する陰謀と畫家ポチチエリ〕
ヂウリアノは華やかな騎士でありフロレンス市
の寵兒である。時めくメヂチ家の偉大なるロレ
ンツオの弟でありフ市隨一の美人シモネツタを
人並優れた武藝の賞として獲ち得た果報者であ
る。然るに彼等夫婦には悲しき運命の目が來
た。シモネツタは肺患に仆れた。二ヶ年經て一
四七八年四月二十六日には不意に陰謀者等の爲
めにヂウリアノは刺れた。年來法王シクスタス
(Sixtus) 四世はメヂチ家を快しとしなかつた。
この意を汲んで法王の甥チオラモ・リアリオ(

Giuliano Riario) が直接の發頭人となつて陰謀
を廻らした。四月二十六日は日曜日であつてヅ
オモで例の如く彌撒の大禮拜が行はれた。ロレ
ンツオもヂウリアノも禮拜に參加してゐた。禮
拜最中に陰謀者はメヂチ兄弟を襲つた。ヂウリ
アノは聖歌合唱隊の席上に追ひつめられて十九
ヶ所の貫通傷をうけて仆れた。ロレンツオは下
僕等にひきづられて聖器安置場に押入れられ有
名な彫刻家ルカ・デラ・ロビア (Luca della
Robbia) の施した彫刻のある青銅の扉を下僕等
が堅く閉して追求者を防いだ。其の爲めにロレ